

カルチャー・ショック

日本人のみた外国

9を大切にする国

岡本美和子

ある年の暮、私は知人の結婚式に出席するため、バンコクから西へ車で約四時間のところにある村へ向かった。その村はまだ道路が舗装されておらず、殆どの家が高床式住居で、屋根はあるが壁がない。ということ、ドアもなければもちろん鍵もない。村人全てが家族のようなこの村では、家の資産にこだわることもなく、盗みをするようなこともないだろう。

式は新婦の実家で行われるが、新郎の家が遠い場合は、村の人の協力を得て世話役の家から新婦の家に向かうことになる。朝七時頃、けたたましい爆竹の音を合図に、世話役の家から新郎一行がスタートした。料理や贈り物などを持った総勢約四〇名の行列が時折奇声を上げながらゾロゾロと歩いて行く。新郎が新婦の家に辿り着いてから家の中に入るまでには何度も邪魔が入る。新婦の家に入りたければ新郎は、お金を払わなければならない。それも繰り返しやってくるので新婦に会うためには小銭がかなり必要になる。新婦の家に入っても、今度は靴を取られないように注意が必要だ。靴を取られると、それを返してもらうためにこれまたお金を払わなければならないのだ。このように次々と出費はかさむが、おめでたい日のお茶目な悪戯なので憎

めないものがある。

さて、家の中に入ると、本題の結婚式が始まった。日本の式と同じように、あちらの伝統に従って様々な儀式が行われたが、それらに共通していたのが、「9」の数字だ。まず、新郎側から新婦側へ結納金が渡されたが、その額は（例えば）九万九千九百九十九と、「9」に徹している。また、来ていたお坊さんの数も九人。行事も七時九分までに新郎の家を出て、八時九分までに新婦の家に着き、九時台に全ての式を終えなければならぬ、といった具合だ。日本では「9」はあまり良い意味には使われないが、タイではなぜ「9」なのか。「9」の発音「ガオ」は、「ガオ」進む」と同音。「ナール前」と合わせて「ガオナー」で「前に進む」、つまり「繁栄」を意味するらしい。日本の「8」が「末広がり」のようなものか。

後で知人に聞いたところ、タイの二〇〇三年度国家予算の歳出が九九九億バーツに設定されたり、ある閣僚が運輸大臣当時「9999」という車のナンバープレートで四〇〇万バーツ（約二〇〇万円）で競り落としたという話もあるとか。

ちなみに、結納金は、風呂敷の上に葉っぱを並べ、その上にお金とゴールドのアク

セサリーを乗せる。そして、その上に親族・関係者が「バイグン」、「バイトン」という名の葉と米を振りかけていく。「バイ」は葉、「グン」はお金、「トン」（トーン）はゴールド。つまり、米と金に困らず、ちゃんと食べていきますように、という願いをかけるのだそう。

式には親族と一部の関係者しか参列しなかったが、その晩、村の巨大集会所には村中の人が集まり盛大な披露宴が行われた。四〇〇人はいただろうか。新郎新婦は全てのテーブルに挨拶して回るため、長々としたスピーチや友人による余興などは一切なく、本人達とその両親が簡単に挨拶した以外は、ステージ上で歌と踊りのショーが繰り広げられていた。歌も踊りもさほど上手くはないが、ミニスカートで踊るダンサー達（これも九人だった）に皆大盛り上がり。そして酒が入ると、参加者も皆ステージ前で陽気に踊りだす。新郎も新婦も親族も、そして村の人たちも皆心から幸せで楽しそう。私も遅れを取らぬよう、グラスの酒を一気に飲み干し、踊りの輪に加わった。ガオナー。新郎新婦、そしてこの陽気な村が永遠に繁栄しますように！

（おかもと みわこ／アジア経済研究所 研究支援部）